

令和 4 年 5 月 1 日現在

機関番号：12601

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19H01183

研究課題名(和文) 自閉症に関する哲学と医学の学際的研究：ドゥルーズ哲学と自閉症研究の融合

研究課題名(英文) Interdisciplinary research on autism across philosophy and medical science:
Deleuzian philosophy and autistic studies

研究代表者

國分 功一郎 (KOKUBUN, Koichiro)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授

研究者番号：70515444

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 9,600,000円

研究成果の概要(和文)：本研究プロジェクトは、自閉スペクトラム症の学際的な研究を通じた人間の再定義を目標としてきた。最終的に本研究会が最も有効と考えた概念ツールの一つが、ラカン派精神分析で用いられるS1/S2の概念である。これは、誕生した人間が社会との相互作用のうちで受け取る最初の衝撃と、その衝撃を言語化していく様を描き出す概念である。この概念を使って本プロジェクトは、たとえばマジョリティ向けにデザインされた建築物がマイノリティの身体を受け付けないように、実は日常言語、すなわちS2もマジョリティ向けにデザインされていて、それにうまくフィットしない身体や感性を持つ人々を受け付けない場合があることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題の成果によれば、人間は自らの身体や感性にフィットするS2をリソースとして持つことができれば、S1という最初の衝撃を言葉にして他人に伝え、衝撃を緩和するとともに、他者とコミュニケーションを行うことができるようになる。だが、S2、要するに日常言語はマジョリティ向けにデザインされていることがしばしばである。したがって、それにフィットしない身体や感性を持つ者たちは自分にフィットするS2を発明していく営みが必要なるのだが、そのことは現在の社会ではほとんど理解されていない。この発明の必要性を明らかにしたところが、本研究課題の最大の社会的成果であると言える。

研究成果の概要(英文)：The objective of this research project has been the redefinition of the human being through interdisciplinary studies of autism spectrum disorder. Ultimately, one of the conceptual tools deemed most valuable by our team in this enterprise was the pair of concepts S1/S2 as deployed in Lacanian psychoanalysis. This concept aims to portray the mechanism whereby a newborn human being verbalises the primal impact it receives through the reciprocity with its society. Using this concept our project has brought to light the fact that, just as, architecture designed to cater to the majority structurally refuses minoritarian bodies, so likewise everyday language (aka S2) is designed for majoritarian usage, giving rise to cases where those whose body and sensibility do not easily adopt its modes are thereby rejected from its pale.

研究分野：哲学

キーワード：自閉症 自閉スペクトラム症 ASD 精神分析 ラカン ドゥルーズ

1. 研究開始当初の背景

現代の哲学は人間という「主体」についての理論を構築するにあたり、その新しいモデルとして自閉症に注目しつつある。この自閉症を、思想、社会、精神分析学、医学の視点から多角的に考察しようというのが本プロジェクトの目的であった。その背景を説明するためには、哲学と精神分析の関係の歴史を振り返っておかねばならない。

哲学における主体の理論が、精神分析学によって大きな影響を受けたことは広く認められている事実であると思われる。言い間違いや夢の中に、主体の意識できない欲望が現れていることを明らかにした精神分析学は、それまでの哲学が前提としてきた主体像を大きく更新した。ここで注目すべきは、ジークムント・フロイトが 19 世紀末のウィーンで精神分析学を創始するにあたり、「神経症 *neurosis*」を主たる分析対象としていたという事実である。精神分析によれば、「正常」な人間の心の中には必ず抑圧がある。神経症はその抑圧が過度であることによって生じる病理に他ならない。フロイトはつまり、神経症の分析を通じて主体一般の心の構造を明らかにしたのである。

精神分析学は 20 世紀になるとフランスにおいて劇的な発展を遂げることになる。その立役者がジャック・ラカンである。ラカンは神経症とは区別される意味での「精神病 *psychosis*」から出発した専門家であり、したがってその理論は特に精神病を巡って精緻化されていくこととなった。神経症が「正常」な主体と同じ精神構造を有するとすれば、精神病においてはその構造そのものがうまく構築されていない、というのがラカンの述べたところである(ラカンはこれを「父の名」の排除」という専門用語で説明した)。

ここで事態は複雑化する。1970 年代以降、精神医学への批判が高まる中で、精神分析もまた激しい批判にさらされた。精神分析はエディプス・コンプレックスを神聖視し、家父長制的・異性愛的な規範を主体に強制しているのではないかという疑問が提示されたのである。その批判の急先鋒がジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリである。彼らは精神病の一形態である「統合失調症 *schizophrenia*」に特に注目しながら、精神疾患を家庭の問題として理解するのは事態の矮小化であり、それを社会、特に「資本主義」との関連の中で理解せねばならないと主張した。この主張は広く受け入れられ、統合失調症をモデルとする主体理論が数多く構築されるところとなった。

しかし 21 世紀に入り、事態は変化しつつある。そしてここが本研究の注目した点である。

統合失調症をモデルとして主体理論を精緻化する哲学研究は急速に勢いを失いつつある。その代わりに、哲学研究の中で——また社会の中でも——注目を集めつつあるのが「自閉症 *autism*」である(「自閉症」とその周辺にある「アスペルガー障害」「自閉スペクトラム症」「社会的コミュニケーション症」などとの関係は、名称の問題も含め、未だ流動的な状況にあるため、ここでは「自閉症」をキーワードとして用いる)。たとえば自閉症への現象学的なアプローチが試みられるなど、新たな主体理論のよりどころとして自閉症が注目されている。また、これまで主体理論を牽引してきた精神分析学に対しては、一部から、自閉症についてのその理論は時代遅れなものではないかとの批判がなされている。つまり自閉症を適切に扱えるかどうか、主体理論を構築する上での一つの基準になりつつある。その背景には自閉症への社会的関心の高まりもある。自閉症の診断数がこの 30 年で激増しているからである。

この変化を象徴するのが、かつて統合失調症の新しい解釈として読まれたドゥルーズの哲学が、いまや、自閉症との関連において読まれるようになってきているという事実である。ドゥルーズによれば、主体は他者との絶えざる接触によって育まれる想像力によって維持されている(ドゥルーズはこれを「無人島に漂着した人間」をモデルに論じた)。したがって、他者との接触が制限されれば主体の想像力は縮減し、世界の知覚の仕方は大きく変容するわけだが、その際の知覚の有り様(事物が奥行きを失い、世界が見えているものに還元される)が、自閉症研究が明らかにしてきた自閉症者の知覚の有り様に非常に似ているのである。ドゥルーズはむしろ自閉症的な主体を主体の根源に見ているという推論がここから成り立つ。

以上を図式化するならば、19 世紀は神経症の世紀、20 世紀は統合失調症の世紀、21 世紀は自閉症の世紀であるということが出来る。この図式化には単なるスローガン以上の意味がある。というのも、以上の症状はそれぞれが各時代の社会体制と強い相関関係にあるからである。神経症が、ミシェル・フーコーによって近代の権力様式として定式化された、強い抑圧をもたらす「規律訓練」と切り離せないことはしばしば指摘されてきたし、ドゥルーズとガタリは統合失調症を社会の観点から論じるにあたり「資本主義」に注目していた。ならば自閉症はどうか？ しばしばコミュニケーションの障害とも言われる自閉症は、コミュニケーションに過度の力点を置く現代の経済体制、一般に「新自由主義」と呼ばれるそれによって急速に病理化・障害化されたのではないかという仮説が提示されている。

ここで次のような問いが提起される。哲学が時代ごとに異なる症状をモデルとしながら主体の理論を作り上げてきたのだとすれば、各理論の関係はどうなっているのだろうか？ 神経症をモデルとする理論と統合失調症をモデルとする理論との間にはある程度の連続性があると

思われるが、それらは自閉症をモデルとする理論にもつながりうるものなのか？ それとも自閉症をモデルとする理論によって、両理論は根本的に訂正ないし否定されるのか？ そもそも同じ人間主体を扱っているにもかかわらず、理論のモデルが時代ごとにここまで大きく変化するのなぜなのか？ 実はそこに主体理論の連続的な発展を見出すことができるのか？ 以上の学術的問いに導かれて本研究課題は遂行された。

2. 研究の目的

本研究課題は次の四つの問いに対して答えを与えようとするものであった。

(a)自閉症は人間主体の新たな哲学的理論を構築する上でどのような可能性をもっているのか？ (b)20世紀後半の哲学が統合失調症を主体理論の重要モデルとしたのに対し、21世紀の哲学は自閉症をその重要モデルとしているように思われるが、それはなぜか？ (c)自閉症は社会がグローバル化と情報化によって特徴づけられる現代において急速に注目されるようになったが、それはなぜか？ (d)現在の自閉症の理解や扱いにはどのような問題があるのか？

3. 研究の方法

哲学と医学の専門家の協同研究によって以上の問いに答えようとするのが本研究課題の方法の特徴であった。上記の四つの目的に対する取り組みは、具体的には次のような分担で行われた。

(a)新しい主体理論のよりどころとして自閉症に注目する試みはまだ始まったばかりであり、研究上の競争の段階にある。四人の研究成果を総合し、哲学と医学の垣根をこえた「自閉的主体」の理論の確立を目指す。具体的に問われるのは「想像力」概念である。自閉症者はしばしば他人の心や見えないものを想像する力が欠如していると言われるのだが、これは正確な診断だろうか？ そこに言われる「想像力」とはいかなるものか？ カント以来の、ハイデggerを経由してドゥルーズへと至る「想像力」概念をいま一度検討する。この問いには主として、研究代表者の國分功一郎と研究分担者の千葉雅也が取り組んだ。

(b)神経症や統合失調症についての精神分析的研究には歴大な積み重ねがある。また神経症と統合失調症が19・20世紀の思想史においてもつ意味もかなり研究が進んでいる。しかし、主体理論のモデルがいま自閉症に取って代われつつあることの意味を、精神分析の側から検討した研究はまだほとんどない。この研究は具体的には、精神分析学の射程を改めて問い直す作業となる。自閉症の時代に精神分析学はなおも有効かという問題が問われることになる。この問いには主として、研究分担者である松本卓也と千葉雅也が取り組んだ。

(c)各時代の主体理論がどんな症状をそのモデルとするかは、その時代の社会経済体制と切り離しては考えられない。神経症と統合失調症についてはある程度、時代とのつながりが研究されている。自閉症については研究は十分ではない。研究分担者の熊谷晋一郎はかねてから、自閉症はグローバル化と情報化を背景とする新自由主義の時代に急速に病理化・障害化されたという仮説を提示してきた。國分と熊谷が、この仮説の具体的・理論的な検証を試みた。

(d)本研究は自閉症を巡って展開するものであるから、その展開と成果は現代社会を生きる自閉症者の生と無関係であってはならない。本研究では近年注目を集めつつある「当事者研究」(困りごとを抱えた本人が、それを専門家に丸投げせず、類似した困りごとを抱えた仲間とともに研究していく試み)が、自閉症研究にもたらした成果を積極的に取り入れることでこの課題に答える。「当事者研究」が明らかにする自閉症者一人一人の声を哲学的理論へとフィードバックすることが試みられる。この問いには主として、熊谷と松本が取り組んだ。

4. 研究成果

研究会を積み重ねる中で、四つの問いは決してバラバラに問うことはできず、それらを総合的に考察することの必要性がより強く認識された。そして、研究会はドゥルーズ哲学を出発点としていたが、さしあたり今の段階では、ラカン派精神分析の或る概念が最もこれらの問いに答えを出す上で有効であることが分かった。それはS1/S2(「エスワン」「エスドゥ」もしくは「エスワン」「エスツー」と読む)の概念である。これはごく簡単に言えば、誕生した人間が社会や環境との相互作用のうちで受け取る最初の衝撃と、その衝撃を言語化していく様を描き出す概念である。S1とは人間に最初に刻み込まれた衝撃(シニフィアン1)を指し、S2とはそれを言語化して次々に言い換えていく連鎖(シニフィアン2)を指す。

S2はごく簡単に言えば、我々が日々用いている日常言語のことである。それをを用いることで、人は自分の体験を人に伝えることができるし、体験の共有によって自らが受けた衝撃を和らげていくこともできる。だが、S2はある一定の身体や一定の感性をもった人々に向けてデザインされている。したがって、たとえば街の建設物がマジョリティ向けにデザインされていて、マ

ジョリティとは異なる身体を持っている人々を受け付けられない場合があるように（建物に階段しかないために、階段を上れない身体を持つ人を受け付けられない等々）、実は日常言語、すなわちS2もマジョリティ向けにデザインされているために、それにうまくフィットしない身体や感性を持つ人々を受け付けられないことがありうる。

そうすると、S2をリソースとして持たない人々はどうしたらよいのだろうか。自らが抱えるS1——これは広い意味でのトラウマと言い換えることができる——を表現できないために、そのS1にずっと固執するということがあり得る。この場合、外部からはその人はコミュニケーションを拒否しているかのように見えるだろう。しかし、そうではなくて、そこで起こっているのは、コミュニケーションの前提となる、S1とS2の連結の不全なのだ。

更には、S1とS2を連結することを諦めて、S1に依拠しないS2をまるで記号のように操作してコミュニケーションを図ろうとする場合が考えられる。この場合には、コミュニケーションをしているようには見えるのだが、どこかふわふわとした印象を与えることになる。その人の身体や感性が言語の出発点にないからである。相手からの信号を受け取ってコミュニケーションを行うどころか、その前に、自らの身体や感性が発している信号をうまく言語化することもうまくできていないのである。

これらの二つの事例は、こうやって分析されなければ、単なるコミュニケーションの障害として処理されてしまう。だが、それは全く事態の本質を取り逃している。建築物の多数派向けデザインを問題にするのと同様に、S2のマジョリティ向けデザイン、すなわち言語のマジョリティ向けデザインを問題にしなければならない。だとすれば考えられるのは、マイノリティがそれぞれの仕方ですら身体や感性に適合したS2を發明していくという営みである。

ところが、サービス業に大きく依存する現代の資本主義は、「コミュニケーション」と呼ばれる営みを過剰に重視しているのだが、その場合の「コミュニケーション」とは現代の資本主義の活動にとって都合のよいそれのことであり、現代の資本主義に適合した者たちのルール(S2)に基づかないあり方を認めない。すると、現代の資本主義が設定したS2に適合できない者は、自分なりのS2を發明するという営みを許されず、ただただ「障害者」として排除されていくということが起こる。

この結論はいわゆるダイバーシティを捉え直す上でも重要な示唆を与えるように思われる。我々が日々用いている日常言語は実はある人々にとってはバリアフルである。だとすれば、日常言語があくまでもマジョリティ用にデザインされているということが社会でも知らなければならない。それはまさしく本当の意味でのダイバーシティという価値を創造する営みの基礎となるものだろう。

本プロジェクトは最終的に研究成果発表シンポジウムを行ったのだが、それを映像作品として残すために映画監督に撮影を依頼した。本研究プロジェクトの研究成果は広く世の中に知られる価値があり、また書籍よりも映像の方がそれを伝えるには適していると考えたからである。現在、映像は公開に向けて最終的な調整を行っている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 1件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 135(1739)
2. 論文標題 取材 車椅子から見た都市交通の変遷、そして当事者研究から学ばべきもの（特集 パラリンピックがひらくインクルーシブな都市）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 建築雑誌 = Journal of architecture and building science	6. 最初と最後の頁 18-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 362
2. 論文標題 インタビュー 障害当事者から見た「やまゆり園事件」 匿名の権利と実名公開の必要性 メディアは数十年つきあう覚悟を（特集 実名と被害者報道）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Journalism	6. 最初と最後の頁 20-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 第4次 (99)
2. 論文標題 当事者研究をあるべき場所に（特集 精神医療改革運動・精神障害当事者運動のバトンをつなぐ）	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神医療	6. 最初と最後の頁 38-48
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎, 菅間正道	4. 巻 107
2. 論文標題 インタビュー 熊谷晋一郎さんに聞く 言葉と知のバリアフリーを目指して：当事者研究が拓く自己と社会	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 人間と教育	6. 最初と最後の頁 4-18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉雅也	4. 巻 14
2. 論文標題 身体の狂気と言語の狂気：平倉圭『かたちは思考する：芸術制作の分析』書評	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 表象	6. 最初と最後の頁 208-211
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉雅也、國分功一郎、村上靖彦、熊谷晋一郎、松本卓也	4. 巻 23
2. 論文標題 ロビンソン・クルーソーは無人島で誰に最初に会うのか：統合失調症から自閉症へ	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 精神看護	6. 最初と最後の頁 36-53
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Alqahtani Saleh, Joseph James, Dicianno Brad, Layton Natasha Ann, Toro Maria Luisa, Ferretti Eliana, Tuakli-Wosornu Yetsa A., Chhabra Harvinder, Neyedli Heather, Lopes Celia Regina, Alqahtani Mazen M., Van de Vliet Peter, Kumagaya Shin-Ichiro, Kim Jong-Bae, McKinney Vic, Yang Yu-Sheng, Goldberg Mary, Cooper Rory	4. 巻 19
2. 論文標題 Stakeholder perspectives on research and development priorities for mobility assistive-technology: a literature review	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Disability and Rehabilitation: Assistive Technology	6. 最初と最後の頁 1~15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/17483107.2019.1650300	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Osumi Michihiro, Sano Yuko, Ichinose Akimichi, Wake Naoki, Yozu Arito, Kumagaya Shin-Ichiro, Kuniyoshi Yasuo, Morioka Shu, Sumitani Masahiko	4. 巻 26
2. 論文標題 Direct evidence of EEG coherence in alleviating phantom limb pain by virtual referred sensation: Case report	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Neurocase	6. 最初と最後の頁 55~59
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1080/13554794.2019.1696368	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 19
2. 論文標題 「傷」の物語：傷によってつながり傷によって回復すること	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学	6. 最初と最後の頁 69-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 1287
2. 論文標題 当事者が自己決定するために何が必要なのか：運動と研究の循環によるニーズの顕在化	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 月刊保団連	6. 最初と最後の頁 4-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 162
2. 論文標題 障害者運動の軌跡から医療をみつめ、「生産性」を問い直す	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 福祉労働	6. 最初と最後の頁 100-106
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 47
2. 論文標題 当事者研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 206-210
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 34
2. 論文標題 どうやってリハ工学にたどり着き、リハ工学が生み出したものを知ったか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 リハビリテーション・エンジニアリング	6. 最初と最後の頁 20-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 立岩真也、熊谷晋一郎	4. 巻 47
2. 論文標題 「痛いのは困る」から問う障害と社会	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 221-229
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 101
2. 論文標題 スティグマと健康格差	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 治療	6. 最初と最後の頁 1346-1349
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 熊谷晋一郎	4. 巻 60
2. 論文標題 ソーシャル・マジョリティ研究：2. 当事者研究とは何か？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 情報処理	6. 最初と最後の頁 955-958
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉雅也、松本卓也	4. 巻 47(6)
2. 論文標題 「 実在 の時代の思想と病理」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 8-21
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 千葉雅也、河南瑠莉、セバスチャン・プロイ、仲山ひふみ	4. 巻 47(8)
2. 論文標題 「加速主義の政治的可能性と哲学的射程」	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 8-23
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 國分功一郎
2. 発表標題 中動態から考える自己
3. 学会等名 日本精神病理学会（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 松本卓也
2. 発表標題 日本の精神医療と「コレクティブ」
3. 学会等名 新潟哲学思想セミナー（NiPhiS）（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Koichiro Kokubun
2. 発表標題 Deleuze and the question of autism: perception, other and likeness
3. 学会等名 7th Deleuze & Guattari Studies in Asia Conference Tokyo 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Masaya Chiba
2. 発表標題 Hole and Stone: The Two Forms of Secret
3. 学会等名 Deleuze/Guattari Camp Tokyo 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Shinichiro Kumagaya
2. 発表標題 Toward Alternative Designs of Sociality and Language Based on Pattern-Finding Characteristics of Autistic Individuals
3. 学会等名 Deleuze/Guattari Camp Tokyo 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Takuya Matsumoto
2. 発表標題 Lacanian and Deleuzian Perspective on Autism
3. 学会等名 Deleuze/Guattari Camp Tokyo 2019 (国際学会)
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計12件

1. 著者名 松本卓也, 武本一美編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 300
3. 書名 メンタルヘルスの理解のために:こころの健康への多面的アプローチ	

1. 著者名 松本卓也, 野間俊一編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 308
3. 書名 メンタルヘルス時代の精神医学入門 : こころの病の理解と支援	

1. 著者名 西見奈子編著, 北村婦美, 鈴木菜実子, 松本卓也著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 福村出版	5. 総ページ数 232
3. 書名 精神分析にとって女とは何か	

1. 著者名 國分功一郎, 熊谷晋一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 新曜社	5. 総ページ数 432
3. 書名 <責任>の生成ー中動態と当事者研究	

1. 著者名 國分功一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 184
3. 書名 はじめてのスピノザ 自由へのエチカ	

1. 著者名 大澤真幸, 國分功一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 左右社	5. 総ページ数 136
3. 書名 コロナ時代の哲学	

1. 著者名 伊藤亜紗編著, 中島岳志, 若松英輔, 國分功一郎, 磯崎憲一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 集英社	5. 総ページ数 224
3. 書名 「利他」とは何か	

1. 著者名 熊谷晋一郎編著, 山田真著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ジャパンマシニスト社	5. 総ページ数 196
3. 書名 なぜ、親は「正しさ」を押しつけてしまうのか?	

1. 著者名 熊谷晋一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 270
3. 書名 当事者研究：等身大の「わたし」の発見と回復	

1. 著者名 熊谷晋一郎著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 ジャパンマシニスト社	5. 総ページ数 204
3. 書名 お母さんの当事者研究：本心を聞く・語るレッスン	

1. 著者名 Koichiro Kokubun	4. 発行年 2020年
2. 出版社 Edinburgh University Press	5. 総ページ数 206
3. 書名 Principles of Deleuzian Philosophy	

1. 著者名 千葉雅也	4. 発行年 2019年
2. 出版社 文藝春秋	5. 総ページ数 184
3. 書名 アメリカ紀行	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	熊谷 晋一郎 (KUMAGAYA Shin'ichiro) (00574659)	東京大学・先端科学技術研究センター・准教授 (12601)	
研究分担者	千葉 雅也 (CHIBA Masaya) (70646372)	立命館大学・先端総合学術研究科・教授 (34315)	
研究分担者	松本 卓也 (MATSUMOTO Takuya) (90782566)	京都大学・人間・環境学研究所・准教授 (14301)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 7th Deleuze & Guattari Studies in Asia Conference Tokyo 2019	開催年 2019年～2019年
--	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------